

女にもてるための四つの条件

—ボラナの恋愛について—

田川 玄

ボラナの人びとの間で生活して二年ほどが過ぎた。ボラナはエチオピア南部とケニア北部に住んでいる牧畜民である。彼らの間で生活していれば、当然男と女の情の絡んだ話を耳にする。ボラナの人たちにとって「恋愛」は人生のもっとも大切なテーマのひとつである。以下、見聞にもとづいてボラナの人たちの恋愛に触れていこう。

恋愛事情

ボラナにおいて結婚前の娘との性交渉は厳しく禁じられている。花嫁は処女でなければならない。ましてや適齢期の少女が男と親しそうに話をするなどということは、もつてのほか、不道德の極みである。結婚前の少女が恋愛をする場はない。いわゆる恋愛結婚などという婚姻形態もボラナには存在しない。駆け落ち婚があるにはあるが、それは秘めた恋愛の末の止むに止まれぬ行動ではなく、男がてっとり早く結婚するための手段である。その一方、女性の結婚後の恋愛は自由であり、婚外性交渉が社会的文化的に認められている。ここでは「人妻の道ならぬ愛」などというものはない。夫以外の男と肉体関係を結んでも、それはたんなる恋愛であり浮気でも不倫でもない。ボラナの女性の恋愛は結婚後にはじまるのである。恋愛とは婚外性交渉のことにほかならない。

恋愛の場において女が男に対して積極的な態度をとることはない。女は求愛に来た男の中から気に入った男を選ぶ。一方、既婚、未婚の区別なく男は女と「寝る」ことができる。もちろん女とは人妻のことである。先に婚外性交渉が社会的文化的に認められてと述べたが、正確に言うと自分の妻が対象となるもの以外の婚外性交渉を認めない

るのであって、ほとんどの夫は自分の妻が自分

外の男と寝ることを認めていない。つまり、他人の女房は寝取ってもよいが自分の女房を寝取られることは我慢ならないということだ。夫公認の婚外性交渉というのもあるのだが、今はそれほど多くはないらしい。ここで「婚外性交渉が社会的文化的に認知されている」という言葉と矛盾するのではないかと怒らないで欲しい。恋愛なんてものは矛盾の塊であるのだから。

ボラナでは男も女も愛人はもつべきものである。それがなくて、何の人生であろう！と人々は言う。その一方で夫は妻に愛人がいることを疑いだすと、あの手この手でその男が誰であるのか探りだそうとする。外泊すると言っておきながら突然、深夜に帰ってきたり、邪魔が入らないように妻を村の外に誘い出し愛人の名前を聞き出そうと彼女を存分に殴り付けたりする。女たちは心の中で歌う。「満腹が人を殺すことだってある。だから夫に殴られて殺されようとも、あの人の名前を告げやしない。」恋愛関係が夫に露見したらどうなるか。女も間男も亭主から殴る蹴るの仕打ちに加え、その後も間男は亭主から難癖をつけられ、無理難題をふっかけられることになる。情夫は賠償として女の亭主にウシを支払い、同じ村であれば亭主が情夫の顔を見ないですむくらい遠くに追い出されることもある。逆上した亭主は何をするかわからない。ある男が女とねんごろにやっていたところを帰ってきた亭主に見つかった。現行犯である。逆上した亭主は銃を持ちだして命乞いをする男に向けて撃った。弾は顔をかすった。

恋愛とは命がけなのである。女たちは言う。「女にとって恋愛は男房とこの世の戦い回し。弱女の、弱い女は弱虫さ。」それは男にとっても同じこ

と。リスクがあるからこそその恋愛である。臆病者に恋愛は無縁である。

恋愛の条件

「女は嘘つきに弱い」ボラナの諺である。この諺に続けて、調査助手から聞いた話をしよう。貧乏でうだつが上がらない嘘つきの男がいた。彼はある女に惚れたのだが、その女はその男が嫌いだった。彼は彼女から拒絶される。彼は一計を案じた。友達の商人からありたつけのお金を借りてポケットをいっぱいにした。さらに、ラジオカセットを借りてその女性のもとに再び現われた。彼は羽振りがよくなったように振る舞い、これからケニアのナイロビに電話すると言って、アンテナを伸ばしたラジオカセットに話し掛け電話している振りをはじめ。「アローアローこっちの村に道路を通すからナイロビでウシを1000頭売ってくれ。500頭じゃない、1000頭だ。」女はころりと騙され、すぐさま彼の愛人となったという。そんな嘘はすぐにばれるだろうに、その後彼女はどうしたのだろうと、私は助手に聞いた。近くにいたおばちゃんがカッカカと笑い「そりゃあ、その後も付き合っているさ」と言い、先の諺を教えてくださいました。

妻であれ愛人であれボラナの男は女を殴る。ある日、私と助手が家で仕事をしていると、顔の傷に薬を塗ってくれとひとりの女性がやってきた。その傷のひどさに驚いて訳を聞くと、彼女の情夫の仕打ちとのこと。私は傷薬を塗ってやり、明日も薬を塗ったほうがいいから来るようにと伝えた。翌日彼女が来たときに他の村人もいて、その傷はどうしたのだと彼女に尋ねる。薪を切りに切った時に誤って傷つけたと、彼女はそっと答える。それを聞いていたまわりの人々は何やらにやにやしている。みんなその本当の理由を知っているのだ。明るる日助手が詳しい話を聞いてきて笑いながら私に話してくれた。「彼女の情夫は彼女が他の男を好きになっただろうと無茶苦茶に嫉妬して、彼女を殴ったらしい。この後に服か服装身具かを彼女に買ってあげるだろうね。」この愛人である男は、最近結婚したばかりだというのに、ほとんど毎日彼女のもとに通っている。それも30キ

ロの距離を歩いてやってくる。「好き合っている者同士には距離は関係ないのよ。」ある女性が私に言った。

調査助手の伯父には妻がふたりいる。ある日、彼が2番目の妻を何かの理由で殴りつけていた。それを見たもうひとりの妻は「彼女は夫がいるから殴られるのだ。私には夫がない」と言った。つまり、彼女は夫に対して自分の夫であるのならば自分も殴って欲しいということを伝えたのである。それを聞いて彼は先の妻を殴ることを止め、その代わりに彼女を殴りはじめたという。

上の話を書いているうちに、O・ヘンリーの短編を思い出した。近所で友人同士のアメリカ黒人の妻とその夫たちの話である。一方の妻は常に夫から暴力を振るわれ顔にあざが絶えないが、殴れた後に夫は彼女に優しく振る舞いプレゼントをしたりする。もう一方の妻の夫は決して怒らなく彼女に手を上げたことは一度もない。殴られる妻は自分が殴られ、その後に優しくされること、つまり、自分が夫からいかに愛されているかを友人であるその妻に自慢する。殴られない妻は自分も夫から殴られたいと願い、洗濯なんてまっぴらと夫に対して悪態をつくのだが、夫は彼女を殴り付けるところか、彼女のために洗濯をはじめるという「悲惨な」結末であった(『黒人街の悲劇』『O・ヘンリー短編集3』、大久保康雄訳、新潮社、1953年)。

ボラナの人々に聞くと妻や愛人を殴らない男は駄目なのだそう。殴らなければ彼女は彼を愛さない。時々殴ると女は男をさらに愛するようになるという。ボラナの男も女もそう言う。しかし、あまり頻繁に殴り過ぎると妻は家出をしてしまうから、殴るのもほどほどにしくはならない。

女への贈り物も大切である。気前よく女に贈り物をする男が好まれる。貧乏では贈り物もままならないので、当然金持ち(ウシ持ち)の方がよい。男は愛人にイヤリングや衣服、サンダルなどを買ってあげる。ウシなどの家畜を贈ることもある。これは、ある男から聞いた話なのだが贈り物を贈る際、前もって何か買ってあげると彼女に言っただけならいい。何も言わずにその場で

贈り物を与えるべきだそう。理由はその方が彼女が驚いて喜びが大きくなるからではなく、何か買ってあげると言ってしまうと女はいつまでもそのことを覚えており、それを男が忘れてしまったら女の心が離れていくのだらだという。これは彼の父親からの忠告だそう。

また、男は勇敢でなくてはならない。しかし、以前のような継続的な隣接民族間の略奪や戦争、ゾウやサイ、ライオンなどの猛獣の狩猟もできな

くなり、勇敢さを示す機会はあまりないようである。

最後に、ボラナにおいて女にもてる条件を示すことにしよう。

- 1) 嘘つき。
- 2) ほどほどに暴力は振るうこと。
- 3) まめな贈り物は大切。
- 4) 勇敢さ。

さて、みなさんいかがでありませうか。

付録：情事の風景

以下の記述は、ボラナでの見聞きや恋愛の歌などをもとに私が想定した情事の風景である。

今日は夫が用事で遠くの村に行っている。今晚は向こうに泊まることになる。夫は言っていた。女はこの日のために町でマカロニを買った。マカロニはボラナでは最高の料理である。鍋の水が沸騰したらマカロニを入れて煮る。煮えたら油で炒めたタマネギを混ぜる。さらに香辛料と砂糖で味付ける。ミルク容器は搾り立てのミルクとヨーグルトで満たされている。身体を洗い、服に香を焚いた。先ほど頭にたっぷりバターを塗った。体の温りで溶け出したバターが首筋から胸元へと滴り落ち、女の体を濡らす。バターは女の肌に滑らかさと艶を与え、薪の炎でなまめかしく光る。男のために噛み煙草も用意してある。万事男を迎える準備は整った。

男は村が寝静まったころやってきた。女の傍によると彼女の体から発する香料の強い石鹸の臭いと女の衣服にまわりついている香の臭いが絡み合っており、男の鼻腔を刺激した。女ははじめにミルク容器を男に渡してミルクを勧める。女が料理を暖め直す。食事が終わり、男は女に体を洗うための水を用意させる。

やがて男と女は同じ床につく。女の形の良い乳房が男の胸板にあたる。そして二人とも眠りに落ちる。深夜、目が覚めた。体が痒い。寝床に南京虫がいるようだ。女は寝床の敷物であるウシの皮を叩き、南京虫を落とそうとする。

男は夜明け前に起きた。村の人々が起きだす前にここを出る方がよい。外はまだ暗い。男は女のもとから帰る。男は帰途自分が懐中電灯を忘れていたことに気がつく。あれが女の亭主に見つかるはず。男は道を引き返す。

女は男が忘れていった懐中電灯を見つける。男に返さなければと思い、懐中電灯を手に男を追いかける。やがて、女は引き返してきた男と出会い彼に懐中電灯を渡し、お互いもと来た道を帰っていく。今度はいつ会えるのだろうか…

ところで、うまい具合に情事が完了しない場合がある。

深夜、目が覚めた。誰かが男の腕をつかんでいる。女の亭主だった。それが分かった時男は亭主の腕を振りほどき、逃げ出そうと戸口へ裸のまま走り寄った。無情にも扉は亭主によって何重にも堅く革紐で結びつけられていた。逃げ場はない。

亭主は鞭で男を殴り付ける。女も同じように殴られている。許してくれという男の懇願は、いつしか悲鳴に変わっていた。女も泣き叫んでいる。この騒ぎに目を覚ました村の人々が亭主を止めようと駆け付けるが、堅く結ばれた革紐はなかなか解けない。ようやく扉が開かれ、村人たちが怒り狂いながら殴り続けている亭主を男から引き離した。

男は知らせを待っていた。彼の親族のひとりが亭主らとの話し合いに向かっていた。男の傷はまだ癒えていなかった。あの日から男は床に伏したままである。やがて男の親族が亭主の要求を伝えに来た。「お前さんがしなくてはならないことは、ウシの群れを杖で追いつながら池まで連れていき水を飲ませるのと同じように、女と一緒に村中のニワトリを池まで連れていき、ニワトリに水を飲ませること、その際、ニワトリの脚や羽根などを絶対につかんだりしてはいけない、ということだ。」

(1996年9月) (たがわ げん 一橋大学)